

## 薬草園をめぐる ⑪

石井竹夫  
(帝京平成大学薬学部)

## 「なめとこ山」は薬草の宝庫

本学の薬草園は、相模湖に近い標高 694 m の石老山の東側の丘陵地にあり、ホウノキ (*Magnolia obovata* T.) など局方生薬「厚朴」の自生状態を観察できる豊かな自然環境の中に位置しています。薬学部のある中野キャンパスから車で1時間半はかかりますが、年に一度は学生を連れていきます。薬草園にはなかなか行けないので、学生には通学路や身近な所にも薬草はたくさんあること、また、文学作品の中にも薬草を扱ったものがあるので、散策しながらあるいは電車の中で読書しながら薬草に積極的に出会ってほしいと伝えています。薬草が出てくる文学の一つとして宮沢賢治の『なめとこ山の熊』<sup>1)</sup>という童話を紹介したことがあります。この童話は、「またぎ」を職業とし、「なめとこ山」で熊を獲ってはその皮と内臓の胆嚢を売って生計を立てている淵沢小十郎の生き様を描いた物語です。「なめとこ山」とは奇妙な名ですが、実在する山です(岩手県の花巻と雫石の境にある標高 860 m の峰)。熊 (*Ursus arctos* L. またはその近縁種) の胆嚢を乾燥させたものは「クマノイ」あるいは「熊胆」(局方生薬)ともいい、苦味健胃、利胆、鎮痙剤として使います。この童話には熊と一緒に風景描写として 15 種ほどの植物が出てきますが、その多くが薬草です。例えば、小十郎が谷で光る白いものに対して母熊と子熊が会話しているのを聞く場面がありますが、ヒキザクラ、キササゲ、クロモジという 3 種の植物が次々と出てきます。美しい文章なので記載してみます。

●

しばらくたって子熊が云った。  
「雪でなけあ霜だねえ。きっとさうだ。」  
ほんたうに今夜は霜が降るぞ、お月さまの近くで胃(コキエ)もあんなに青くふるへてゐるし第一お月さまのいろだつてまるで氷のやうだ、小十郎がひとりで思った。  
「おかあさまはわかったよ、あれねえ、ひきざくらの花。」  
「なあんだ、ひきざくらの花だい。僕知ってるよ。」  
「いゝえ、お前まだ見たことありません。」  
「知ってるよ、僕この前とつて来たもの。」  
「いゝえ、あれひきざくらではありません、お前とつて来たのきさゝげの花でせう。」  
「さうだらうか。」子熊はとほけたやうに答へました。小十郎はなぜかもう胸がいっぱいになってもう一ぺん向ふの谷の白雪のやうな花と余念なく月光をあびて立ってゐる母子の熊をちらっと見てそれから音をたてないやうにこっそりこっそり戻りはじめた。風があちへ行くな行くなと思ひながらそろそろと小十郎は後退りした。くろもじの木の間が月のあかりといっしょにすうっとさした。

●

宮沢賢治『なめとこ山の熊』より  
(下線は本稿著者による)



コブシの花と蕾



コブシの果実(拳の形に似ている)



キササゲの花

ヒキザクラは東北地方で使われる呼び名(方言)でコブシ (*Magnolia kobus* D. C.) のことです。あえてヒキザクラにしたのには理由があると思われます。「ヒキ」は「白く輝く」の意味のようです。白く輝く「サクラ」ということでしょうか。「サクラ」の「サ」は田の神、「クラ」は座のことで、「サクラ」は穀霊の依りつく神の座ということです(『折節の花』栗田子朗)。田植えの頃に花が咲くこととも関係します。また、ヒキザクラはその直前に出てくる「胃(コキエ)」と対になっています。胃(コキエ)星はおひつじ座の41番星とその付近の小さな星で、天の五穀を司る星座のことです(中国名で胃宿)。多分、コブシをヒキザクラという方言で記載したのは、穀物(食糧)と関係する神聖な植物ということが言いたかったのかもしれない。東北の農業を救おうと

した賢治らしい表現です。コブシは、相模湖周辺のホウノキと同様にモクレン科の落葉高木で春にたくさんの白く輝く花を咲かせます。これが熊たちには雪や霜に見えたのでしょうか。コブシは薬用植物でもあります。花蕾は漢方で使う「辛夷」(局方生薬)です。頭痛、鼻炎、歯痛に用います。キササゲ (*Catalpa ovata* G. D.) はノウゼンカズラ科の落葉高木で、果実を乾燥したものは局方生薬になり、「梓実(しじつ)」ともよばれ、利尿薬とします。また、クロモジ (*Lindera umbellata* T.) はクスノキ科の落葉低木で、枝葉に芳香性のある油( $\alpha$ -phellandrene, terpineol)を多く含みます。枝を折ると強い香気を放ちます。芳香料、皮膚病に用います。

賢治は、「熊の胆」を題材にした『なめとこ山の熊』を創作したとき、植物も薬用になるものにしたかったものと思われます。まさに賢治の描いた「なめとこ山」は文学の中の薬草園です(本学の薬草園にもコブシとキササゲは植栽されています)。もしも、散策中の道端や文学作品の中で薬草らしいものを見つけたら、「どうしてそこに登場してきたのだろうか」と思案しながら、実際に薬草園に出かけ、匂いと一緒によく観察してそれらが薬草であるかどうか、あるいは、似た植物で区別しなければならぬ危険な植物がないかどうか等を確認するとよいと思います。

#### 引用文献

- 1) 宮沢賢治. “なめとこ山の熊”. 東京, 筑摩書房, 2001, p. 58-69, (宮沢賢治全集, 7). (ISBN 4-480-02008-XC0193)